

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

概要書

芸能武術のエスノグラフィー

The ethnography of “Folk Entertainment Martial Arts”

2015年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

田邊 元

TANABE, Gen

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授

1. 研究目的

本研究の目的は、流派武術由来といわれる民俗芸能により提起される問題とは何かを示し、その提起された問題が武道研究史上、どのように位置付くかを明らかにすることである。

これまで、流派武術由来といわれる民俗芸能は、武術を研究対象とする研究領域である武道研究において研究対象とされずにきた。このような民俗芸能の実態をみると、その演武は古武道とあまり違いがないようにみえる。では、なぜ研究対象とされないのか。そのような民俗芸能の存在を等閑視して描かれる武道史や武道文化とは、恣意的に描かれたものではないか。このような問題意識が背景にある。

本研究では、第1に流派武術由来といわれる民俗芸能の実態を明らかにし(第1部)、第2にそのような民俗芸能により示される問題を検討することで(第2部)、前述の研究目的を、民俗学・スポーツ人類学の手法を用いて明らかにしていった。

2. 結果と考察

第1部では、流派武術由来といわれる民俗芸能の実態を明らかにするため、熊谷市の上川原地区に伝承される無形民俗文化財、神道香取流を対象にエスノグラフィーを描いた。

第1章では、神道香取流の担い手たちが持つ「武術である」という意識を明らかにした。「武術である」という意識は80年代後半以降に生まれ、現在まで保存会において支配的な認識であるといえる。しかし、保存会会員のほとんどは「武術である」と語りながらも、それが指し示す内容を語ることは出来ない。その中で、保存会を主導する瀧澤とAは、それぞれの経験をもとに「武術」という認識を説明する。そして、現在の神道香取流では失われたとされる技法を、その認識のもとに「復興」しているのである。その「復興」の指向には「古武道」があり、いわば神道香取流の「古武道」化を目指しているといえる。

第2章では、神道香取流の歴史に対して再解釈を行った。神道香取流は「古武道」化を目指しているが、一方で古老層による教授や、通過儀礼的に行われる伝授、呪術的側面など、いわゆる古武道と呼ばれるものとも違う面が存在した。そのため、改めてそれらが神道香取流においてどのような位置づけかを考察した。結果として、神道香取流には上川原における「一人前」を育てる機能が期待されており、まさに「民俗」といえるような伝承が近世末期から文化財となる1950年代まで行われていたことが明らかになった。これは、今まで先行研究でいわれる武術伝承のあり方とは違う、民俗としての武術の存在を示すものといえる。

第2部では、第1部で有効性が明らかになった流派武術由来といわれる民俗芸能が、なぜ武道研究において対象とならないのかを検討し、対象とした時に武術研究に対していったいどのような問題提起をすることが出来るのか検討した。また、その過程で流派武術由来といわれる民俗芸能がどのようなものであるかを検討し、「芸能武術」という語で概念化した。

第3章では、武道研究が依拠する「武道」・「古武道」概念の成立を検討した。近世に誕生したこれらの概念は、武術の持つ「娯楽的見世物的性格」＝「芸能的性格」を排除することで成立しており、この考え方は現在でも支配的である。しかし、近世における武術伝承にはそのような性格が含まれていたことが明らかにされている。つまり、流派武術由来といわれる民俗芸能のような、周縁的な武術伝承を取り扱わずに描かれる武道史や武道文化とは恣意的に形成されたともいえる。

第4章では、流派武術由来といわれる民俗芸能を研究対象としてきた、民俗学を中心とした領域において、武術とはどのような対象とされていたのかを検討した。民俗学では対象に対して信仰的側面をみる傾向があり、そのため「始源」・「古風」・「伝統」・「信仰」等の「イデオロギー」が想起されなければ「民俗芸能」とされなかった状況があった。武術に対してもその傾向がみられ、流派武術由来であることは検討されることが少なかったと言える。

第5章では、第3章と第4章の検討を踏まえ、流派武術由来といわれる民俗芸能を改めて定義し、概念化することを目標に検討してきた。武道・古武道概念が排除した「芸能的性格」とは、「見る/見られる」という関係性の中で、「第三者の視点」を意識したときに現れる性格」といえる。すなわち、流派武術由来といわれる民俗芸能は「流派武術を基としながら、「芸能的性格」を持った武術」ということが出来、このような武術を「芸能武術」という語を用い分析概念として定義した。また、第5章では地方誌等を用いて、日本に存在する芸能武術といえるような事例がどの程度あるかを示し、文献から読み取れる「芸能的性格」も検討した。

第6章では、南山城村に伝承される「棒振り」という芸能を、そのもととなった「長谷川流棒術」と比較することで、「芸能的性格」の検討を行った。その結果、流派の持つ特徴的技法の消失、打突点の曖昧さ、動作のタイミングの協調等の相違がみられた。これらから、芸能武術の演武者は形の持つ対人を意識した理合よりも、協調した動作を優先することに、その意識が向いていることが明らかになった。また、「武道」や「古武道」といった概念が持つ当為性に捉われない柔軟な工夫が行われていることも明らかとなった。

以上から、本研究は以下のことを明らかに出来た。第1に、先行研究でいわれるような武術伝承とは別の、民俗として伝承される武術の一事例を示した。第2に、流派武術由来といわれる民俗芸能の伝承には、武術の持つ一様式が含まれていると同時に、民衆により伝承されることにより、殺傷を目的としない、別の意図が組み込まれた可能性があることを示した。第3に、「古武道」化を指向するような、現在起きている現象の存在を明らかにした。この点は、未消化な部分もあるが現在の武術文化を考える際の下絵となろう。これら本研究の成果は、武道研究が等閑視してきた領域の存在を明らかにし、同時にその研究可能性についても示したといえよう。